

長畑明利教授 略歴・業績

〈略 歴〉

学 歴

- 1981年 3月 東京外国語大学外国語学部英米語学科卒業
1981年 4月 東京外国語大学外国語学研究科ゲルマン系言語専攻課程（英語学）入学
1983年 9月 ニューヨーク州立大学オールバニー校大学院英語学部修士課程入学
1985年 5月 ニューヨーク州立大学オールバニー校大学院英語学部修士課程修了（MA）
1986年 3月 東京外国語大学外国語学研究科ゲルマン系言語専攻課程（英語学）修了（文学修士）

職 歴

- 1986年 4月 東京スチュワーズ専門学院非常勤講師（1988年 3月まで）
1987年 4月 北里大学薬学部非常勤講師（1988年 3月まで）
1988年 4月 名古屋大学総合言語センター講師（1990年 1月まで）
1990年 2月 名古屋大学総合言語センター助教授（1991年 3月まで）
1991年 4月 名古屋大学言語文化部助教授（1998年 3月まで）
1994年 4月 スタンフォード大学客員研究員（1995年 6月まで）
1998年 4月 名古屋大学国際言語文化研究科助教授（2004年 3月まで）
2004年 4月 名古屋大学国際言語文化研究科教授（2017年 3月まで）
2006年11月 名古屋大学国際学術コンソーシアム推進室副室長（2007年 9月まで）
2014年 4月 名古屋大学教育研究評議会評議員（2019年 3月まで）
2014年 4月 名古屋大学国際言語文化研究科副研究科長（2015年 3月まで）
2017年 4月 名古屋大学人文学研究科教授（現在に至る）
2017年 4月 名古屋大学国際言語文化研究科長（2022年 3月まで）
2017年 4月 名古屋大学国際機構副機構長（2022年 3月まで）
2019年 4月 名古屋大学人文学研究科副研究科長（2022年 3月まで）
2019年 4月 名古屋大学総長補佐（国際化推進担当）（2020年 3月まで）
2020年 4月 名古屋大学副総長補佐（2021年 3月まで）

〈業 績〉

I 著書

- 1 *Readings in the Cantos*, Volume 2, Clemson UP, August, 2022. (共著、Richard Parker 編)
- 2 『激動期のアメリカ——理論と現場から見たトランプ時代とその後』大学教育出版、2022年 3月 (共著、山岸敬和、岩田仲弘編)

- 3 *The New Ezra Pound Studies*, Cambridge UP, October, 2019. (共著、Mark Byron 編)
- 4 『教室の英文学』 研究社、2017年5月 (共著、日本英文学会(関東支部) 編)
- 5 『抵抗することば——暴力と文学的想像力』 南雲堂、2014年7月 (共著、藤平育子監修、高尾直知・舌津智之編)
- 6 『あめりか いきものがたり——動物表象を読み解く』 臨川書店、2013年6月 (共著、辻本庸子・福岡和子編)
- 7 『アジア系アメリカ文学を学ぶ人のために』 世界思想社、2011年9月 (共著、植木照代・山本秀行・村山瑞穂編)
- 8 『語り明かす古典アメリカ文学12』 南雲堂、2007年3月 (共著、アメリカ文学の古典を読む会編)
- 9 『20世紀アメリカ文学を学ぶ人のために』 世界思想社、2006年10月 (共著、山下昇・渡辺克昭編)
- 10 『アメリカ文化史入門——植民地時代から現代まで』 昭和堂、2006年3月 (共著、亀井俊介編)
- 11 『異郷の身体——テレサ・ハッキョン・チャをめぐる』 人文書院、2006年3月 (共著、池内靖子・西成彦編)
- 12 『記憶の宿る場所——エズラ・パウンドと20世紀の詩』 思潮社、2005年11月 (共著、土岐恒二・児玉実英監修)
- 13 『アメリカ帝国と多文化社会のあいだ——国際比較文化フォーラム21世紀』 開文社、2003年 (共著、林康次編)
- 14 『21世紀から見るアメリカ文学史——アメリカニズムの変容』 英宝社、2002年12月 (共著、早瀬博範・吉崎邦子編) [2018年4月改訂、早瀬博範編]
- 15 『アメリカン・モダニズム——パウンド、エリオット、ウィリアムズ、スティーヴンズ』 せりか書房、2002年4月 (共著、富山英俊編)
- 16 『モダニズムの越境』 人文書院、2002年3月 (共著、モダニズム研究会編)
- 17 『亀井俊介と読む古典アメリカ小説12』 南雲堂、2001年7月 (共著、アメリカ文学の古典を読む会編)
- 18 『インターネットと英語学習』 開文社、2001年3月 (共著、名古屋大学言語文化部・国際言語文化研究科公開講座委員会編)

II 事典等

- 1 『アメリカ文化事典』 丸善出版、2018 (アメリカ学会編) [編集幹事]
- 2 *Oxford Research Encyclopedia of Literature*. Oxford UP, March, 2018. Online. (General ed., Paula Rabinowitz) [Guest editor]
- 3 『英語文学事典』 ミネルヴァ書房、2007 (木下卓、窪田憲子、高田賢一、野田研一、久守和子編) [項目執筆]

III 論文

- 1 「アメリカ文学とミシシッピ川——神話と距離」『フォークナー』 No. 22、2020年7月、pp. 52-71.

- 2 「辺境のパウンド、エリオット」 *T. S. Eliot Review*、第31号、2020年3月、pp. 1-16.
- 3 「Post-truth vs. 「言語詩」——トランプ時代の前衛詩」 *Ezra Pound Review*、第21号、2019年3月、pp. 57-69.
- 4 「終末の詩人ボブ・ディラン——救世主イエスを信じるユダヤ人の視点から」『港（ナマール）』第23号、2018年3月、pp. 2-24.
- 5 “The Reception of Ezra Pound and T. S. Eliot in Prewar Japan.” *Oxford Research Encyclopedia of Literature*, general editor, Paula Rabinowitz, Oxford UP, March, 2018, Online, DOI: 10.1093/acrefore/9780190201098.013.209.
- 6 「アジア系詩人による言語実験の評価について——Timothy Yu の考察を手がかりに」 *AALA Journal*, No. 22, 2017年3月、pp. 1-8.
- 7 “Theresa Hak Kyung Cha’s Playful Writing in *Exilée* and *Temps Morts*.” *Foreign Literature Studies* [『外国文学研究』], Vol. 35, No. 5, Spring 2013, pp. 23-29.
- 8 「「偏狭さ」に抗して——エズラ・パウンドの「ルネッサンス」構想」『アメリカ研究』第47号、2013年3月、pp. 41-57.
- 9 「アジア系アメリカ人詩人による言語実験とアイデンティティ——テレサ・ハッキョン・チャとミュンミ・キムを中心に」『文化表象のグローバル研究——研究成果中間報告』北山研二編、成城大学グローバル研究センター、2014年3月、pp. 113-126.
- 10 「自己を書くこと、みんなを（と）書くこと——ガートルード・スタインの『みんなの自伝』」『マーク・トウェイン 研究と批評』第11号、2012年5月、pp. 49-58.
- 11 「ミナ・ロイの越境と修辞——初期詩篇を読む」科学研究費報告書『境界の消失と再生——19世紀後半から20世紀初頭の欧米文学』基盤研究(B) (課題番号 20320054) 代表西川智之、2012年3月、pp. 43-65.
- 12 「白人らしさと黒人らしさ——雑誌 *Fire!!* とモダニズム」『言語文化論集』第32巻、第1号、2010年10月、pp. 97-126.
- 13 「はるか彼方の土地から先祖たちが呼ぶ声——エスニシティの抑圧と顕現」『現代思想（総特集＝ボブ・ディラン）』第38巻、第6号（5月臨時増刊号）、2010年5月、pp. 115-123.
- 14 「エズラ・パウンドの「原語主義」——*The Japan Times* 寄稿文に見るフェノロサ草稿の発展」『言語文化研究叢書』第9号、2010年3月、pp. 1-18.
- 15 「「ウォーターボーディング」の表象——反復とパロディ」科学研究費報告書『20世紀における恐怖の言説』基盤研究(B) (課題番号 18320056) 代表田所光男、2009年3月、pp. 41-55.
- 16 “Pound’s Reception of Noh Reconsidered: The Image and the Voice.” *Ezra Pound, Language and Persona (Quaderni di Palazzo Serra 15)*, edited by Massimo Bacigalupo and William Pratt, Università degli Studi di Genova, 2009, pp. 113-125.
- 17 「「捨てること」の限界——「えてるにたす」に見る「否定」」『言語文化』（明治学院大学言語文化研究所）第25号、2008年3月、pp. 121-135.
- 18 「Hart Crane の詩の不透明性とセクシュアリティ」『言語文化論集』第27巻、第2号、2006年3月、pp. 109-126.

- 19 「ボブ・ディランの歌詞に見る引用とエスニック・アイデンティティ」科学研究費報告書『20世紀ポピュラー音楽の言葉：その文学的および社会的文脈の解明』基盤研究(C)(2) (課題番号 16520205) 代表田所光男、2006年3月、pp. 81-94.
- 20 「調和と死——戦意高揚詩としての“Little Gidding”」『古典を読み直す』(『言語文化研究叢書』第4号)、2005年3月、pp. 55-70.
- 21 「ブラックフェイスと風刺—— Spike Lee の *Bamboozled* を読む」総長裁量経費報告書『多元文化と未来社会』代表吉村正和、2005年3月、pp. 151-168.
- 22 「Woody Allen 作品におけるユダヤ系アメリカ人表象再考——*Annie Hall*、*Zelig*、*Crimes and Misdemeanors* を読む」科学研究費報告書『20世紀ディアスポラ・ユダヤ人のアイデンティティ』基盤研究(C)(2) (課題番号 14510644) 代表田所光男、2004年3月、pp. 77-98.
- 23 「隠蔽と仄めかし——John Yau の詩におけるエスニック・アイデンティティの攪乱」*ALA Journal*、No. 9、2003年3月、pp. 32-39.
- 24 「エリオットのモダニズムと黒人詩人——Melvin B. Tolson の T. S. Eliot 受容」『英語青年』第149巻、第3号、2003年6月、pp. 150-153 (14-17).
- 25 「*Transport to Summer* における戦争・抽象・系譜」『言語文化論集』第24巻、第2号、2003年3月、pp. 169-187.
- 26 “The Composition of the 20th-Century Salt Commissioner: Pound’s Social View and Its Aesthetic Reflection in ‘Canto 98’ and ‘Canto 99.’” *Ezra Pound: Dans le Vortex de la Traduction, Annales du Monde Anglophone*, No. 16, edited by Hélène Aji, Jan., 2003, pp. 63-73.
- 27 「視覚詩を読むこと——Steve McCaffery の *Carnival*」『言語文化論集』第24巻、第1号、2002年10月、pp. 209-221.
- 28 「シェヘラザードの魔人——初期 John Barth のポストモダン小説論における形式と社会性」『多元文化』第2号、2002年3月、pp. 131-141.
- 29 「並置と力——パウンドの「漢字的抽象」」*Ezra Pound Review*、第3号、2000年10月、pp. 1-14.
- 30 「「立つこと」と「立たぬこと」——*Poems, 1920* の Sweeney 詩篇再読」『英文學研究』第51巻、第1号、1998年9月、pp. 31-41.
- 31 “Emily and Noriko: Two Cases of Representation of Historical Change”『中部アメリカ文学』第1号、1998年3月、pp. 27-40.
- 32 「言語詩と歴史——Susan Howe の *Articulation of Sound Forms in Time*」『英語青年』(上) 第143巻、第5号、1997年8月、pp. 210-212 (34-36)、(下) 第143巻、第6号、1997年9月、pp. 329-331 (37-39).
- 33 「*The Making of Americans* と「グリッド」——ガートルード・スタインの文体と抽象」『言語文化論集』(1) 第18巻、第2号、1997年3月、pp. 103-115、(2) 第19巻、第1号、1997年11月、pp. 127-140.
- 34 「“Sunday Morning” における曖昧な説得」『言語文化論集』第18巻、第1号、1996年10月、pp. 213-226.
- 35 「インターネットと現代詩：調査と予備的考察」『〈特定研究〉言語文化情報の電子化とインターネット』(名古屋大学言語文化部)、1996年3月、pp. 57-78.

- 36 「John Ashbery における疑似ダイアローグ——モノローグ性回避の試み」『アメリカ文学』（日本アメリカ文学会東京支部）第52号、1994年4月、pp. 27-35.
- 37 「*The Crying of Lot 49*における「沈黙のコミュニケーション」」『〈特定研究〉情報とコミュニケーション』（名古屋大学言語文化部）、1993年3月、pp. 5-23.
- 38 「父親コンプレックスのアレゴリー——小津安二郎の『晩春』を読む」『言語文化論集』第14巻、第1号、1992年11月、pp. 1-15.
- 39 「*Vineland*の系譜学」*RANDOM*（東京外国語大学英語英文学研究会）No. 17、1992年9月、pp. 105-118.
- 40 「「凸面鏡の自画像」——アッシュベリーの「騙し絵」」『〈特定研究〉言語表現とイメージ』（名古屋大学総合言語センター）、1991年3月、pp. 5-39.
- 41 “Wallace Stevens’ Political Giantology: Personification and Distortion” 『アメリカ文学研究』第27号、1991年2月、pp. 49-65.
- 42 「記憶のフェティシズム——アッシュベリーと時間」『〈特定研究〉言語表現と時間』（名古屋大学総合言語センター）、1990年3月、pp. 50-76.
- 43 「*Gravity’s Rainbow* における『支配』の構造(1)——『物語』とマゾキズム」『言語文化論集』第11巻、第2号、1990年3月、pp. 103-122.
- 44 “The Wardrobe and the Net: A ‘Potential Plot’ in John Ashbery’s ‘Scheherazade’” 『言語文化論集』第10巻、第2号、1989年3月、pp. 181-197.
- 45 “Wallace Stevens’ Subversive Imagination: A Reading of ‘Description without Place.’” *RANDOM*（東京外国語大学英語英文学研究会）No. 12、1987年6月、pp. 31-56.
- 46 “A Boundary, Imagination and the Poet: Stevens’ Poetry of Threshold” 『言語・文化研究』（東京外国語大学大学院外国語学研究科言語・文化研究会）第4号、1986年4月、pp. 9-17.
- 47 「クリスピンのディレンマ——スティーブズにおける現実と虚構の二律背反」*RANDOM*（東京外国語大学英語英文学研究会）No. 11、1986年3月、pp. 60-77.

IV 翻訳

- 1 「The Hill We Climb 「私たちが登る丘」」『中日新聞』2021年1月29日、朝刊、p. 22. [Amanda Gorman の詩の抄訳]
- 2 「『詩篇』第59篇」*Ezra Pound Review*、第18号、2016年3月、pp. 73-82. [Ezra Pound, “Canto 59” の翻訳と訳注]
- 3 「「自然との結びつき」——ソーニャ・サンチェスのハイクについて」『名古屋アメリカ文学・文化』第3号、2014年3月、pp. 23-37. [Luo Liangong, “‘A Connection with Nature’: On Sonia Sanchez’s Haiku” の翻訳]
- 4 「階級腹話術——女性の手紙、講演、叙情詩」『名古屋アメリカ文学・文化』第2号、2013年3月、pp. 1-25. [Paula Rabinowitz, “Class Ventriloquism: Women’s Letters, Lectures and Lyrics” の翻訳]
- 5 「コスモポリタン？ それともクレオール？——グローバル化した大洋と島嶼的アイデンティティ」『比較マイノリティ学』第3号、2012年3月、pp. 1-25. [Françoise Lionnet, “Cosmopolitan or Creole Lives? Globalized Oceans and Insular Identities,” *Profession*, 2011, pp. 23-43の翻訳]

- 6 『世界文学史はいかにして可能か』(共訳)成美堂、2011年10月 [*New Literary History*, Vol. 39, No. 3, Summer 2008の翻訳、木内徹、福島昇、西本あづさ監訳]
- 7 「『詩篇』第60篇」*Ezra Pound Review*、第12号、2010年3月、pp. 43-57. [Ezra Pound, “Canto 60”の翻訳と訳注]
- 8 「『詩篇』第98篇」*Ezra Pound Review*、第4号・第5号(合冊号)、2003年3月、pp. 68-81. [Ezra Pound, “Canto 98”の翻訳と訳注]
- 9 「『一千年の平和の国』他」『るしおる』第50号、2003年6月、pp. 52-61. [James Merrill 作品の翻訳と解説]
- 10 「時と線について」『現代詩手帖』1999年7月、pp. 84-85. [Charles Bernstein, “Of Time and the Line”の翻訳]
- 11 「現実、虚構、そして『最後の物たちの国で』」『ユリイカ』1999年1月(特集=ポール・オースター)、pp. 190-194. [Sven Birkerts, “Reality, Fiction, and *In the Country of Last Things*,” *The Review of Contemporary Fiction*, Vol. 14, No. 1, Spring 1994, pp. 66-69の翻訳]
- 12 “A Crisis before ‘the Crisis’: On Mallarmé’s ‘Les Fenêtres.’” *Mallarmé in the Twentieth Century*, edited by Robert Greer Cohn, Associated UP, 1998, pp. 143-156. [川瀬武夫「〈危機〉以前の危機——マラルメ《窓》をめぐって」(『早稲田大学大学院 文学研究科紀要』第2分冊、第41輯、1995年、pp. 43-44)の翻訳]

V 書評

- 1 「『パターソン』の牧歌的性格と少数民族に関する詩人の態度」『図書新聞』第3415号、2019年9月14日、p. 6. [江田孝臣『『パターソン』を読む——ウィリアムズの長篇詩』の書評]
- 2 「文学作品の読解により、世紀転換期の様相全体を浮かび上がらせる——人種・エスニシティの観点から、階級・ジェンダーの視点も加えて多層的に論じる」『図書新聞』第3327号、2017年11月18日、p. 3. [里内克巳『多文化アメリカの萌芽——19~20世紀転換期文学における人種・性・階級』の書評]
- 3 「Marjorie Perloff, *Unoriginal Genius: Poetry by Other Means in the New Century*」『英文學研究』第89号、2012年12月、pp. 123-127. [書評]
- 4 「ポストモダニズム文化の「発展的拡張」——幅広い具体例から探られる時代と文化の変容」『図書新聞』第3037号、2011年11月12日、p. 4. [麻生亭志『ポストモダンとアメリカ文化』の書評]
- 5 「ジェイムズ・メリル作/志村正雄訳『イーフレイムの書』『ミラベルの数の書』『ページェントの台本(上・下)』」『英語青年』第154巻、第8号、2008年11月、pp. 481-482 (53-54). [書評]
- 6 「名古屋比較文化フォーラム(NCCF)・成田興史編『英米文学・英米文化試論——太平洋横断アメリカンスタディーズの視座から』」『中部アメリカ文学』第11号、2008年、pp. 31-33. [書評]
- 7 “Betsy Erkkila, *Mixed Bloods and Other Crosses: Rethinking American Literature from the Revolution to the Culture Wars*.” *Studies in English Literature* (English Number), No. 49, 2008, pp. 123-129. [書評]

- 8 「亀井俊介監修・平石貴樹編『アメリカ——文学史・文化史の展望』、『アメリカ学会会報』第158号、2005年、p. 2. [書評]
- 9 「Steven Meyer, *Irresistible Dictation: Gertrude Stein and the Correlations of Writing and Science* (Stanford: Stanford University Press, 2001)」 *Ivy*、第35号、2002年、pp. 129-133. [書評]
- 10 「阿部公彦『モダンの近似値——スティーヴンズ・大江・アヴァンギャルド』、『英文學研究』第79巻、第1号、2002年9月、pp. 71-75. [書評]
- 11 「ガートルード・スタインとともに」、『英語青年』第145巻、第4号、1999年7月、pp. 256-257 (76-77). [アリス・B・トクラス著、高橋雄一郎・金関いな訳『アリス・B・トクラスの料理読本——ガートルード・スタインのパリの食卓』の書評]

VI その他

- 1 「詩についての授業を振り返る——メリルとベリマンを中心に」 *RANDOM* (東京外国語大学英語英文学研究会) No. 43 (志村正雄教授追悼号)、2023年3月、pp. 39-49.
- 2 「29th Ezra Pound International Conference 報告」 *Ezra Pound Review*、No. 25、2023年3月、pp. 61-67.
- 3 「米詩人 ルイーザ・グリック ノーベル文学賞受賞」『中日新聞』2020年10月27日、夕刊 p. 5.
- 4 「アメリカ詩の研究」『英語年鑑2019』研究社、2019年1月、pp. 21-25.
- 5 「アメリカ詩の研究」『英語年鑑2018』研究社、2018年1月、pp. 21-24.
- 6 「「痩せた男のバラッド」——ボブ・ディランの歌詞の魅力」『學士會会報』第925号 (2017-VI)、2017年7月、pp. 62-66.
- 7 「アメリカ詩の研究」『英語年鑑2017』研究社、2017年1月、pp. 20-23.
- 8 「アメリカ詩の研究」『英語年鑑2016』研究社、2016年1月、pp. 22-25.
- 9 「読み応えあり」[「読者の声」]『マーク・トウェイン 研究と批評』第15号、2016年4月、pp. 122-123.
- 10 「アメリカ詩の研究」『英語年鑑2015』研究社、2015年1月、pp. 21-24.
- 11 「アメリカ詩の研究」『英語年鑑2014』研究社、2014年1月、pp. 21-24.
- 12 「アメリカ詩の研究」『英語年鑑2013』研究社、2013年1月、pp. 21-24.
- 13 「文学的創造への熱意を受け継ぐ——第51回日本アメリカ文学会全国大会開催に寄せて」『週刊読書人』2012年10月12日、p. 6.
- 14 「第24回国際エズラ・パウンド学会報告」 *Ezra Pound Review*、第14号、2012年3月、pp. 37-48.
- 15 「アメリカ詩の研究」『英語年鑑2012』研究社、2012年1月、pp. 22-26.
- 16 「陈昂与耶稣会：《诗章》59至61章中的冲突与儒学」(尚晓进訳), *English and American Literary Studies*, No. 14 (Spring, 2011), pp. 41-47.
- 17 「著作紹介：田野勲著『祝祭都市ニューヨーク——1910年代アメリカ文化論』」『L&C Bulletin』(名古屋大学国際言語文化研究科年報) 第1号、2009年10月、p. 11.
- 18 「名古屋大学全学教育「英語新カリキュラム」の概要及び若干の考察」『名古屋高等教育研究』第9号、2009年3月、pp. 5-19.

- 19 科学研究費報告書『エズラ・パウンドの能体験と「抽象」』基盤研究(C)(2)、課題番号18520189、2008年3月、pp. 1-50.
- 20 「「アンドウンブルの歌」に送られて——Nathaniel Mackey, *Splay Anthem*」(「リレー連載：21世紀の洋書棚」)『英語青年』第153巻、第10号、2008年1月、pp. 611-613 (27-29).
- 21 「戦時の二重の夢——John Ashbery, *A Worldly Country*」(「リレー連載：21世紀の洋書棚」)『英語青年』第153巻、第4号、2007年7月、pp. 228-230 (36-38).
- 22 科学研究費報告書『T・S・エリオットの2種の「抽象」——構成主義と普遍性』基盤研究(C)(2)、課題番号16520206、2006年3月、pp. 1-96.
- 23 「文学部門 コメント」『京都アメリカ研究夏期セミナー10周年成果報告』立命館大学アメリカ研究セミナー、2006年、pp. 26-28.
- 24 「John Berryman, “Dream Song 76 Henry’s Confession”——声色詩人の暗い告白」(〈訳注式英語詩演習〉)『英語青年』第151巻、第4号、2005年7月、pp. 228-230 (36-38).
- 25 “Modernist Aesthetics for Radicalism?—Why Not?: Response to Linda Wagner Martin, “The Radical and the Poetic in American Modernism.”” *Proceedings of the Kyoto American Studies Summer Seminar, July 29–July 31, 2004*, edited by Hiroshi Yoneyama and Ai Hattori, Center for American Studies, Ritsumeikan University, 2005, pp. 167-176.
- 26 「『ディクテ』上演とシンポジウム——コリアン・ディアスポラとアート」『立命館言語文化研究』第16巻、第1号、2004年6月、pp. 95-119. [池内靖子、オ・ギョンスク、木村典子、松田正隆、鄭暎恵子、徐京植、北原恵、嶋田美子、金恵信、イトー・タリーとの共著 (シンポジウムの記録)]
- 27 科学研究費報告書『ハート・クレインと「抽象」——構成主義と同性愛』基盤研究(C)(2)、課題番号14510515、2004年3月、pp. 1-99.
- 28 「アメリカ詩の20世紀、そして21世紀——大衆化と革新性の行方」『英語青年』第148巻、第10号、2003年1月、pp. 620-623 (20-23).
- 29 「テロリズムと虚構——ブレット・イーストン・エリスの『グラモラマ』」『國文學』第47巻、第10号、2002年8月、pp. 60-64.
- 30 “Response to Professor Cheung’s Lecture.” *AALA Journal*, No. 6, 2000年12月、pp. 18-22.
- 31 「視覚性の「吸収」——英語圏におけるインターネットと詩」『現代詩手帖』2000年4月号、pp. 80-85.
- 32 「ガートルード・スタインの“and”あるいは「つけ加えること」」『八事』第16号、2000年、pp. 58-61.
- 33 「新しい虚構を求めて——ウォレス・ステイヴンズ」『週刊朝日百科』第38巻、第6号、2000年、pp. 242-243.
- 34 「第18回国際エズラ・パウンド学会報告」*Ezra Pound Review*、第2号、1999年10月、pp. 41-47.
- 35 「hoax の諸相——偽の被爆者詩人アラキ・ヤスサダの事件を中心に」『平成11年度名古屋大学ラジオ放送公開講座「だます・だまされる」』、1999年7月、pp. 99-108. [公開講座テキスト]
- 36 「“play by ear”——エリクソン・イン・ナゴヤ」『ドリーム——エリクソンと日本作家が語る文学の未来』越川芳明編、筑摩書房、1999年6月、pp. 212-216.

- 37 「リスニング教材の利用と作成」『名古屋大学言語文化部・国際言語文化研究科公開講座「インターネットと英語学習」』、1999年6月、pp. 1-8. [公開講座テキスト]
- 38 『たのしく読める英米女性作家——作品ガイド120』石井倫代・窪田憲子・久守和子編、ミネルヴァ書房、1998年5月（項目執筆）
- 39 「「吠えるを通して書く」——言語詩とビート詩の微妙な関係」『総特集アレン・ギンズバーグ』（『現代詩手帖』特集版）思潮社、1997年12月、pp. 141-151.
- 40 “The Yasusada Affair—Ethics or Aesthetics? ... The Kent Johnson/Akitoshi Nagahata Letters.” *Jacket*, #2 (December, 1997), <http://jacketmagazine.com/02/yasu.html>, 29 October, 2023. [Kent Johnson との電子メールによる往復書簡]
- 41 「架空の被爆者詩人を巡って——捏造か連帯の願望か、原爆問う議論乏しく」『朝日新聞』1997年8月19日、夕刊 p. 6.
- 42 “Radical Artifice in the '90s: An Interview with Professor Marjorie Perloff.” 『英語青年』第141巻、第8号、1995年11月、pp. 390-398 (2-10).
- 43 「最近の話題作」（「海外新潮」）『英語青年』第139巻、第10号、1994年1月、p. 510 (30).
- 44 「80年代のアメリカ詩とアッシュベリーの近作」（「海外新潮」）『英語青年』第139巻、第7号、1993年10月、p. 355 (31).
- 45 「H. D. の romans a clef」（「海外新潮」）『英語青年』第139巻、第4号、1993年7月、p. 187 (31).
- 46 「アメリカ詩のアヴァンギャルド」（「海外新潮」）『英語青年』第139巻、第1号、1993年4月、p. 31.

VII 口頭発表

- 1 “Composition with History as a Legacy: Reading the Historical Account of Hideyoshi in Canto 58.” 30th Ezra Pound International Conference（2023年6月30日、エディンバラ大学）
- 2 「Ezra Pound, *The Cantos* における Alexander Hamilton 批判——高利と決闘」日本英文学会第95回全国大会（2023年5月20日、関東学院大学関内キャンパス [ハイフレックス方式]）
- 3 「Wallace Stevens の “An Ordinary Evening in New Haven” における「最高ならざる虚構」」日本英文学会中部支部第74回大会（2022年10月22日、オンライン）
- 4 “Walt Whitman’s Underwater Vision.” 国際シンポジウム Blue Humanities: Anglo-American Literature/Culture and the Aquatic Environment（2020年3月15日、名古屋大学）
- 5 “John Ashbery’s Haiku and Haibun.” 国際シンポジウム Anglo-American Literature/Culture and Japan（2019年3月17日、名古屋大学）
- 6 “Reading Poetry in a Japanese EFL Classroom, or What Does It Mean to Read Poetry in a Foreign Language?” 国際シンポジウム Anglo-American Literature/Culture and Education（2018年3月17日、名古屋大学）
- 7 “Gloss Translation and The Cantos.” 27th Ezra Pound International Conference（2017年6月22日、ペンシルヴェニア大学）
- 8 “The Signs on the Invisible Wall: *The Crying of Lot 49* as a Wall Novel.” 国際シンポジウム “Walls” in Anglo-American Literature and Culture（2017年3月11日、名古屋大学）

- 9 “Mobility and Speed in Mina Loy’s ‘Anglo-Mongrels and the Rose.’” 国際シンポジウム “Mobility” and North American Literature/Culture (2016年3月21日、名古屋大学)
- 10 “‘Pasturage excellent’: Emperor Kangxi’s Description of the Mongolian Land in ‘Canto 60.’” The 26th Ezra Pound International Conference. (2015年7月9日、Brunnenburg Castle [Dorf Tirol, Italy])
- 11 “Rosmarie Waldrop’s *A Key into the Language of America* as a Cultural Translation.” The 3rd Convention of the Chinese/American Association for Poetry and Poetics. (2014年12月19日、上海師範大学)
- 12 「Roger Williams, *A Key into the Language of America* (1643) から Rosmarie Waldrop, *A Key into the Language of America* (1994) へ——翻訳と反復について考える」日本アメリカ文学会中部支部例会 (2014年6月21日、椙山女学園大学)
- 13 “Vietnamese Chefs in Alice’s Kitchen: Stein, Toklas and Indochina.” 国際シンポジウム American Literature/Culture in a Global Context. (2014年3月6日、名古屋大学)
- 14 “Economic Exchange and Juxtaposition in Canto 96 and 97.” The 25th International Ezra Pound Conference (2013年7月12日、トリニティー・カレッジ [ダブリン])
- 15 “Theresa Hak Kyung Cha’s Playful Writing in *Exilee* and *Temps Morts*.” The 2nd Chinese/American Association for Poetry and Poetics Conference (International Symposium on Modern and Contemporary Literatures in English) (2013年6月9日、華中師範大学 [武漢])
- 16 「パウンドと『新しき土』——*The Japan Times* 寄稿記事に見るノスタルジアと日中関係」日本アメリカ文学会中部支部例会 (2012年6月16日、中京大学)
- 17 “*Tender Buttons* as Poetry of Mock-Explanation.” Dialog on Poetry and Poetics: The 1st Convention of Chinese/American Association for Poetry and Poetics (2011年9月30日、華中師範大学 [武漢])
- 18 “Revisiting the Fenollosa Manuscripts in *The Japan Times*: Pound’s Language of Nostalgia and the International Affairs.” The 24th International Ezra Pound Conference (2011年7月7日、ロンドン大学)
- 19 “An Idea of Order in the Confucian Ethics: The Father-Son Relationship in Pound’s ‘Chinese History Cantos.’” 3rd International Conference “Modernism and the Orient” (2010年6月9日、三台山荘 [杭州])
- 20 “Chen Mao and the Jesuits: Conflict and Confucianism in ‘Canto 60.’” The 23rd International Ezra Pound Conference (2009年7月2日、チェントロ・ストウディ・アメリカーニ [ローマ])
- 21 「パウンドの「中国詩篇」に見る〈終わり〉と〈始まり〉——「詩篇56」を中心に」日本アメリカ文学会中部支部例会 (2007年9月15日、中京大学)
- 22 “‘Down, Down! Han Is Down’: Pound’s Interpretation of the Ends of Dynasties in the ‘Chinese Cantos.’” The 22nd International Ezra Pound Conference (2007年6月26日、ヴェニス国際大学)
- 23 “Noh and Pound’s Voices.” The 21st International Ezra Pound Conference (2005年7月6日、クラリッセ劇場 [ラパッコ])

- 24 「Hart Crane の詩の不透明性とセクシュアリティ」日本アメリカ文学会全国大会（2004年10月16日、甲南大学）
- 25 「1990年代の「終末論的気分」——ドン・デリロの『マオII』」日本アメリカ文学会中部支部月例会（2003年1月25日、名古屋大学）
- 26 「John Yau, *My Symptoms*, *Hawaiian Cowboy* を読む」アジア系アメリカ文学研究会例会（2002年1月12日、京都外国語大学）
- 27 “The Composition of the 20th-Century Salt Commissioner: Pound’s Social View and Its Aesthetic Reflection.” The 19th International Ezra Pound Conference（2001年7月7日、ソルボンヌ大学）
- 28 「話す苦痛／話せぬ苦痛——テレサ・ハク・キュン・チャの『ディクテ』を読む」英語圏ポストコロニアリズム研究会（2000年10月、中京大学）
- 29 “Pound and Abstraction Reconsidered.” 日本エズラ・パウンド協会大会（1999年10月30日、東京都立大学）
- 30 “The Ideogrammic Method, the ‘Luminous Detail’ and Abstraction Reconsidered.” The 18th International Ezra Pound Conference（1999年7月19日、北京外国語大学）
- 31 「パウンドの『抽象』嫌い——再検証」日本アメリカ文学会中部支部月例会（1999年6月19日、名古屋大学）
- 32 “Creating and Developing a Listening Library.” JACET 中部支部大会。Linda Woo と（1998年6月、名古屋学院大学）
- 33 「言語詩と歴史——Susan Howe の *Singularities*」日本アメリカ文学会全国大会（1996年10月5日、札幌大学）
- 34 「ガートルード・スタインの〈反抽象〉」日本英文学会全国大会（1993年5月15日、東京大学）
- 35 「Thomas Pynchon, *Vineland* (1990) を読む」日本アメリカ文学会中部支部月例会（1990年11月17日、名古屋大学）
- 36 「スティーブンス・巨人・政治」日本アメリカ文学会全国大会（1989年10月21日、岡山大学）
- 37 「John Ashbery の “Scheherazade” を読む」日本アメリカ文学会中部支部月例会（1988年9月17日、名古屋大学）
- 38 「John Ashbery の詩について」日本アメリカ文学会東京支部月例会（1988年1月30日、慶應義塾大学）

VIII シンポジウム等講師

- 1 “Thy True Heritage: The Future of Pound Studies—An Open Discussion.” 30th Ezra Pound International Conference. Mark Byron, John Gery, Roxana Preda と（2023年6月30日、University of Edinburgh）。
- 2 ““Old Friends the Most” II: Modernist Friendships: A Roundtable Discussion.” 29th Ezra Pound International Conference. John Gery (Chair), Marjorie Perloff, Zhaoming Qian, Robert von Hallberg と（2022年6月26日、Online）。

- 3 「大学生に必要な母語・外国語の力」(担当「指定討論」) 2019年度名古屋大学教育基盤連携本部シンポジウム。趣旨説明：佐久間淳一、話題提供：高井次郎、生田博志、奥田真也(2019年12月4日、JRゲートタワーホール [名古屋])。
- 4 「アメリカ文学とミシシッピ川」(担当「ミシシッピ川とアメリカ詩——神話と距離」) 日本ウィリアム・フォークナー協会第22回全国大会。時実早苗(兼司会)、里内克巳と(2019年9月14日、駒澤大学)。
- 5 “Roundtable: After the Pound Era”(担当“Post-war Reception of Ezra Pound in Japan”). 28th Ezra Pound International Conference. Mark Byron (司会), Anderson Araujo, Chengru He, Andrew Houwen と(2019年6月28日、University of Salamanca)。
- 6 “Distant-reading Elizabeth Bishop and Travels” [ASAK Panel] (担当“Questions of Travel in the Works of Elizabeth Bishop and Yoko Tawada”) アメリカ学会年次大会. Tomoyuki Iino (Chair), Yangsoon Kim, Meghan Kuckelman と(2018年6月3日、北九州市立大学)。
- 7 「Pound, Politics, Post-Truth」(担当「Post-Truth vs. 「言語詩」」) 日本エズラ・パウンド協会大会。遠藤朋之(司会)、藤巻明、江田孝臣と(2017年11月4日、椋山女学園大学)。
- 8 「詩の善し悪し——西洋古典から英米まで」(担当「前衛詩と bad poetry——詩の「善し悪し」を超えて」) 日本英文学会全国大会。桂山康司(兼司会)、稲垣直樹と(2017年5月20日、静岡大学)。
- 9 「ポストモダニズムとアジア系アメリカ文学」(担当「アジア系詩人による言語実験の評価について」) 第24回 AALA フォーラム。アジア系アメリカ文学研究会。山本秀行(司会)、牧野理英、麻生享志と(2016年9月24日、神戸大学)。
- 10 「新学科のグローバル人材化方略」(担当「G30「比較言語文化」プログラムとグローバル人材育成」) グローバル人材育成教育学会。糸井重夫(モデレーター)、アーナンダ・クマラ、田村豊、小野博(コメンテーター)と(2016年9月3日、愛知東邦大学)。
- 11 「“neatly and modestly dressed, speak quietly but do not mumble, respect their elders”——1950年代のアメリカの女性詩人たち」(担当「女ビート再考」) 日本英文学会。渡部桃子(兼司会)、朝比奈緑、松川祐子と(2012年5月27日、専修大学生田キャンパス)。
- 12 “Revisiting the 1930s in American Literature and Culture.” 国際言語文化研究科アメリカ文学・文化シンポジウム(担当“Rereading Wallace Stevens in the 1930s”) Ayumi Kobayashi, Saori Iwatsuka, Yuri Shakouchi, Shota Yamabe, Yoko Tsuchiya, Takaomi Konoki, Mark Weeks と(2012年3月11日、名古屋大学)。
- 13 “New Models of Situatedness in Experimental Poetry”(担当“Errors, Translation and Situatedness in the Poetry of Theresa Hak kyung Cha, Yoko Tawada and Araki Yasusada”) Annual Convention, Modern Language Association. Susan Vanderborg, Ming-Qian Ma と(2009年12月28日、Lowes Philadelphia Hotel)。
- 14 「英語・英米文学研究を英語教育にどう活かすか」(担当「英米文学を読まない授業における英米文学研究者」) 日本英文学会全国大会。山本史郎[司会]、中村哲子、西村義樹と(2009年5月30日、東京大学駒場キャンパス)。
- 15 「欧米の市民社会の諸相」(担当「オールド・ニグロとニュー・ニグロ——黒人の地位向上と教養主義」) 西川智之(兼司会)、山口庸子と(2009年1月16日、名古屋大学)。

- 16 「How Was It Black?—モダニズム再考」(担当「How White Was It?—ハイ・モダニズムと黒人詩人」) 日本アメリカ文学会全国大会。後藤和彦(司会)、佐藤宏子、上野直子、新田啓子と(2008年10月12日、西南学院大学)。
- 17 「素人の文学」(担当「ポエトリー・スラムにおける「素人」と「非・素人」) 日本アメリカ文学会中部支部大会。尾崎俊介(兼司会)、田口朋子と(2006年4月23日、中京大学)。
- 18 「20世紀ポピュラー音楽の言葉——その文学的および社会的文脈の解明」(担当「ボブ・ディランの歌詞に見る引用(または盗用)」) 日本比較文学会中部支部大会。田所光男(兼司会)、布施哲、藤井たぎると(2005年12月3日、名古屋大学)。
- 19 「アメリカ文学研究と日本の大学の教養教育」(担当「アメリカ文学研究者の英語教育」) 日本英文学会全国大会。小林憲二(兼司会)、柴田元幸、藤森かよこと(2004年5月23日、大阪大学)。
- 20 「『ディクテ』上演とシンポジウム: コリアン・ディアスポラとアート」立命館大学国際言語文化研究所 連続講座「国民国家と多文化社会」第14シリーズ「コリアン・ディアスポラ——交差する多様な表現」池内靖子(司会)、オ・ギョンスク、木村典子、松田正隆、鄭映恵子、徐京植、北原恵、嶋田美子、金恵信、イトー・ターリと(2003年11月29日、立命館大学)。
- 21 「越境、もうひとつのモダニズム」モダニズム研究会出版記念シンポジウム「モダニズムの越境」三宅昭良(兼司会)、村田宏、宇沢美子と(2003年1月11日、立命館大学)。
- 22 「The Poems of Our Climate——詩における20世紀、そして21世紀」(担当「イズムと言語」、兼司会) 日本英文学会全国大会。富山英俊、高岸冬詩、城戸朱理と(2001年5月19日、学習院大学)。
- 23 「アメリカ文学の音、声、サウンドスケープ——聴覚的想像力を考える」(担当「オルフェウスの朗読とは?——サウンドスケープとしての朗読考」) アメリカ文学会中部支部大会。結城正美(兼司会)、藤井明子と(2001年4月22日、名古屋大学)。
- 24 “Other-Wise: Post-Subjectivity.” (担当“The Fate of Subjectivity in the 90s: The Case of Japanese Poets”) Annual Convention, Modern Language Association. Joseph P. Donahue, Ming-Qian Ma, Susan Vanderborg と(2000年12月29日、ワシントン D.C.)。
- 25 「後期の『詩篇』を読む」(担当 *Thrones*、兼司会) 日本エズラ・パウンド協会大会。平野順雄、遠藤朋之と(2000年10月28日、名古屋大学)。
- 26 「In the End Is the Beginning?——二つの世紀末を越えて」(担当「Steve Erickson の *Arc d’X* における〈終わり〉と〈始まり〉」) 名古屋大学英文学会大会。橋本恵(司会)、平出昌嗣、角田信恵と(2000年4月22日、名古屋大学)。
- 27 「W. Stevens を見直す、読み直す」現代英米詩協会大会。新倉俊一(兼司会)、酒井信雄、渡辺信二、阿部公彦と(1999年11月20日、大妻女子大学)。
- 28 「語るもの／語りえぬもの——歴史の記憶と文学」(担当「『他者としての証言?』——アラキ・ヤササダの hoax をめぐって」) 日本アメリカ文学会全国大会。鶴殿えりか(兼司会)、武田悠一、高橋哲哉と(1998年10月18日、広島女学院大学)。
- 29 「モダニズムとエリオット——『1920年詩集』を中心に」(担当「スウィーニー詩篇とアメリカ性(原始性)」) 日本 T. S. エリオット協会大会。池田栄一(兼司会)、三宅昭良、佐藤亨と(1996年11月9日、就実女子大学)。

- 30 「モダニズムとレズビアニズム」(担当「スタインとレズビアン的エクリチュール?」、兼司会) 日本アメリカ文学会中部支部大会。谷本千雅子、村山瑞穂と(1996年4月21日、椙山女学園大学)。
- 31 「パウンドとモダニズム」(担当「パウンドとスティーヴンズ」) 日本エズラ・パウンド協会大会。富山英俊、渡辺桃子、池田栄一と(1993年10月、立教大学)。
- 32 「ウォレス・スティーヴンズのヴィジョン——“Sunday Morning”を中心に」 中部英文学会大会。池谷忠敏(兼司会)、田中泰賢、平野順雄と(1992年10月、淑徳女子大学)。
- 33 「ポストモダニズムとフィクション」(担当「初期 John Barth のポストモダン小説論とその実践」) 日本アメリカ文学会中部支部大会。藤平育子(兼司会)、中田晶子と(1991年4月21日、名古屋大学)。
- 34 「ジョン・アッシュベリーの詩はこう読め」 日本アメリカ文学会東京支部月例会。飯野友幸(兼司会)、富山英俊と(1990年6月30日、慶應義塾大学)。
- 35 「ゴシックに語る」(担当「Pynchon」) 名古屋大学英文学会大会。神尾美津雄(兼司会)、唐沢恪と(1989年4月、名古屋大学)。

IX 講演

- 1 「辺境のパウンド、エリオット」 日本 T. S. エリオット協会全国大会(2019年11月19日、椙山女学園大学)
- 2 「ポップ・ディランとエスニシティ——1970年代～80年代前半を中心に」 神戸・ユダヤ文化研究会(文化講座)(2018年3月31日、兵庫県私学会館)
- 3 「移動と停止のモダニズム——ミナ・ロイを中心に」 九州アメリカ文学会大会(2015年5月9日、鹿児島大学)
- 4 “Theresa Hak Kyung Cha’s Playful Writing in *Exilee* and *Temp’s Morts*.” The 2nd CAAP [Chinese / American Association for Poetry and Poetics] Conference (International Symposium on Modern and Contemporary Literatures in English) (2013年6月9日、華中師範大学 [武漢])
- 5 「アジア系アメリカ人詩人による言語実験とアイデンティティ——テレサ・ハッキョン・チャとミュンミ・キムを中心に」 成城大学「文化表象のグローバルプロジェクト」第4回研究会(「人種・ジェンダー・コロニアリズムと実験詩学」)(2012年11月30日、成城大学)
- 6 「エズラ・パウンドは何をやっていたのか?——「詩篇60」を通じて考える」 神戸市外国語大学外国学研究所2010年度研究班「もう一つのモダニズム——1920年代、30年代のアメリカ女性詩人」3月定例研究会(2011年3月19日、於「UNITY」[神戸])
- 7 「反知性主義について」 名古屋大学平成21年度教育実習事前指導(2009年4月1日、名古屋大学)
- 8 「パウンドの魅力/パウンドの闇——いまこの詩人をどう読むか」 金城学院大学大学院英文学会大会(2007年10月6日、金城学院大学)
- 9 「多言語によるアメリカ文学」 英語圏ポストコロニアリズム研究会(2003年3月16日、中京大学)
- 10 「教養教育について」 英語圏ポストコロニアリズム研究会(2002年3月、中京大学)
- 11 「ポストコロニアリズム文学としてのアジア系アメリカ文学」 英語圏ポストコロニアリズム研究会(2001年3月、中京大学)

X 講演会等コメンテーター／リスポンダント

- 1 立命館京都アメリカ研究夏期セミナー10周年記念講演会・シンポジウム（2005年10月21日、キャンパスプラザ京都）（文学部門報告 [中川優子] に対して）
- 2 “Modernist Aesthetics for Radicalism?—Why Not?: Response to Linda Wagner Martin, ‘The Radical and the Poetic in American Modernism: Faulkner, Hemingway, Dos Passos, Toomer, Stein, Williams, Cather and Others.’” アメリカ研究夏期セミナー（2004年7月、立命館大学）
- 3 Walter Benn Michaels 教授講演会（2002年5月2日、名古屋大学）（講演 Walter Benn Michaels, “Empire of the Senseless” に対して）
- 4 プロジェクト BV 共生と多様——普遍性研究会（2002年3月、立命館大学）（講演 Wladimir Romuald Kryszynski, “Rethinking the Avant-Garde: Transformation or Death?” に対して）
- 5 AALA 10周年フォーラム。アジア系アメリカ文学研究会（1999年10月11日、シーパル神戸）（基調講演 King-Kok Cheung, “Interracial Encounters in Asian American & Other Ethnic Literature” に対して）

XI 科学研究費補助金

- 1 「エズラ・パウンドの「辺境」意識：その変遷と儒教およびファシズム」科学研究費補助金、基盤研究 (C)、2018年～2023年、課題番号：18K00412、研究代表者。
- 2 「エズラ・パウンドの「高利」批判とアメリカ建国の父祖——儒教、ファシズムとの「符号」」科学研究費補助金、基盤研究 (C)、2014年～2017年、課題番号：26370314、研究代表者。
- 3 「エズラ・パウンドの経済論と創作原理——「利子」と「抽象」」科学研究費補助金、基盤研究 (C)、2011年～2013年、課題番号：23520295、研究代表者。
- 4 「エズラ・パウンドの儒教受容とファシズム——「表意文字的手法」の末路」科学研究費補助金、基盤研究 (C)、2008年～2010年、課題番号：20520222、研究代表者。
- 5 「エズラ・パウンドの能体験と「抽象」」科学研究費補助金、基盤研究 (C)、2006年～2007年、課題番号18520189、研究代表者。
- 6 「T・S・エリオットの詩における2種の「抽象」——構成主義と普遍性」科学研究費補助金、基盤研究 (C)、2004年～2005年、課題番号：16520206、研究代表者。
- 7 「ハート・クレインと「抽象」——構成主義と同性愛」科学研究費補助金、基盤研究 (C)、2002年～2003年、課題番号：14510515、研究代表者。
- 8 エズラ・パウンドの抽象観に見られる「個別主義」の揺らぎ（文学における形式と社会意識）」科学研究費補助金、基盤研究 (C)、1996年、課題番号：08610475、研究代表者。
- 9 「ガートルード・スタインの文体実験における「反抽象」（文学における形式と社会意識）」科学研究費補助金、1991年、課題番号：03710211、研究代表者。

XII 学会活動

- 1 日本アメリカ文学会（会員：1987年4月～現在、編集委員：2006年4月～2009年3月、2014年4月～2016年3月、編集委員長：2018年4月～2020年3月、大会運営委員：2001年4月～2004年3月、代議員：2014年4月～2022年3月、中部支部長：2014年4月～2018年3月）

- 2 日本英文学会（会員：1990年4月～現在、編集委員：2003年4月～2006年3月、大会準備委員：2012年9月～2015年6月）
- 3 Modern Language Association（会員：1994年～現在）
- 4 日本エズラ・パウンド協会（会員：1995年4月～現在、事務局長：2006年4月～2010年3月、理事：2006年4月～現在、編集委員：2010年4月～2018年3月、編集委員長：2013年4月～2018年3月、2021年4月～現在、会長：2018年4月～2023年3月）
- 5 アジア系アメリカ文学研究会（現アジア系アメリカ文学会）（会員：1999年4月～現在）
- 6 アメリカ学会（会員：2000年～現在、年次大会企画委員：2010年6月～2012年6月、常務理事：2013年6月～2016年6月）
- 7 名古屋アメリカ研究夏期セミナー運営委員（2006年～2011年）
- 8 名古屋大学アメリカ文学・文化研究会代表（2011年～現在）
- 9 29th Ezra Pound International Conference [2022年6月24日～26日 Online 開催] co-convenor、国際学会京都大会実行委員会代表

XIII 公開講座講師

- 1 「世界の文学で国際理解～米文学で学ぶアメリカの文化と歴史・社会背景～」天白生涯学習センター公開講座（2020年11月～12月）
- 2 「世界の文学で国際理解～米文学で学ぶアメリカの文化と歴史・社会背景～」中川生涯学習センター公開講座（2020年1月～2月）
- 3 「言葉と文化の国際交流」（担当「エズラ・パウンドの能と漢詩とモダニズム」）名古屋大学国際言語文化研究科公開講座（2009年6月～7月、[担当日：6月10日]）
- 4 「恐怖を読み解く——日々の生活から国際政治まで」（担当「チャールズ・ブロックデン・ブラウンの恐怖小説を読む」）名古屋大学大学院国際言語文化研究科公開講座（2006年6月～7月、[担当日：6月22日]）
- 5 「美と文化」（担当「パークのサブライム論について」）名古屋大学言語文化部・大学院国際言語文化研究科公開講座（2002年6月～7月、[担当日：7月13日]）
- 6 「イメージと文化」（担当「視覚詩について」）名古屋大学言語文化部・大学院国際言語文化研究科公開講座（2001年6月～7月、[担当日：6月23日]）
- 7 「性と文化」（担当「不能と小説」）名古屋大学言語文化部・大学院国際言語文化研究科公開講座（2000年6月～7月、[担当日：7月22日]）
- 8 「だます・だまされる」（担当「hoaxの諸相——偽の被爆者詩人アラキ・ヤサダの事件を中心に」）名古屋大学ラジオ放送公開講座（1999年7月～10月、[担当回放送日：8月16日]）
- 9 「インターネットと英語学習」（担当「リスニング教材の利用と作成」）名古屋大学言語文化部・大学院国際言語文化研究科公開講座（1999年6月26・27日）
- 10 「愛の諸相——外国文学に見るさまざまな愛のかたち」（担当「性的不能者と奔放な女性の恋愛——ヘミングウェイの『日はまた昇る』」）中京大学オープンカレッジ（1998年5月～7月、[担当日：6月18日]）